

インクルーシブ研修により N o. 4

2016. 5. 23 杉並区立杉並第四小学校 高橋 浩平

子どもと指導者の感覚のズレ



高円寺中との小中一貫が始まりました。

(5月20日 対面式)

春先に行われた低学年の遠足、1年生と2年生が合同で行くので、お弁当を食べた後、学年やクラスを解体して、縦割りで班活動がありました。1年生が2人程度、2年生が2人程度で1グループ4～5人で班をつくりクイズラリーをしました。もちろん、班活動ですから「みんなまとまって歩くように、2年生は1年生のめんどうをよく見るよう」いう指導をした上での活動です。

様子を見ていたら、女の子が2人で歩いていて、「あれ？あとのは？」と聞いたら、返ってきた答えが「だってこないんだもん」というものでした。

以前の感覚だと、「いやいや班で動かないといけないでしょ」という感じですが、あまりにも「そうだ、班で動かなきゃ」という感じがなかったので、少しひっくりした次第です。

このことについて、少し考えてみました。少なくともこの子は何の罪悪感もなく、悪びれるでもなく、「だってこないんだもん」と言っている訳です。集団で（この場合は4人で）動くということは「わかっている」のでしょう。しかし、「集団で動かないといけない」とは思っていないのかな、とも思います。見方を変えれば、「私はちゃんと歩いているのに、ついてこない他の人が悪い」という感じでしょうか。そこを自己中心的、といってしまえば簡単なのかもしれません、本人に「自己中心的」だという自覚はないでしょうね。そうすると、①班で動きましょう→わかりました②何の意識もなく歩く③「あとのは？」と聞かれて「だってこないんだもん」（指摘されて初めて気付く？いや意識もない？）ということなんでしょう。ひと昔前だと、①班で動きましょう→わかりました（班で動かないといけない）→班で動くことを意識する→班で動くこと

ができていたか意識する→班で動いてなくて注意されたらその注意を受け入れる。といったことが「当たり前の感覚として」あったように思うのです。しかし、今では「わかりました」→了解はしました。程度の感覚かなと思うのです。

この感覚の違い、というのを指導者側が理解し自覚できるかどうか、このあたりが鍵のような気がします。ベテランの指導者はどうしても、以前の感覚で「そうじやなくてこうでしょ」と思うだろうし、班で動いてなければ、班で動くことを求め注意するでしょう。しかし本人は「ルールを破っている」という意識はないわけですから、「なんで先生にそんなことを言われなくてはいけないんだ」→「あの先生はわかっていない」→「あの先生は嫌いだ」→「ということをきたくない」というような感じになり、ますます対立が進んだりします。

だからといって、子どもの感覚を「それでよし」とすると集団活動自体が成り立たなくなり、おおげさにいえば、教育活動自体が危機に瀕します。ですから、「君がそう思うのはよくわかる（受容）、でもね、こうして欲しいんだ（ルールの確認と、それを守って欲しい、というこちらの思い）」的なアプローチが必要になるんだろうな、と思っています。

しかし、そこは本当にめんどくさい、という思いもあります。そこまで気をつかってやらないといけないの、と先生たちから批判も受けそうです。しかし、現実的には、そういうめんどくささを引き受け、根気よく丁寧にやっていくことが必要なのでしょう。

そんなことを考えると、本当に今の先生たちはよくやっている、とも思います。そうした子どもたちと指導者の「感覚のずれ」という問題抜きに、「最近の先生は頼りない」とか「昔の先生は威厳があった」とか「毅然とした指導が足りない」という意見はどうなのかなと個人的には思います。

少なくとも、子どもの発言や行動を分析し、そこにどんな思いがあるのか、看取っていく作業は必要でしょう。実は、このことは「児童・生徒理解」といて、昔から教師の必須の力として言われてきたことでもあります。そういう意味では、私達教員は改めて「児童・生徒理解」をしっかりとやろう、ということなんだと思います。

指導者側に求められるのは、そうした子ども達の発言や行動を、子どもたちのせいにするのではなく、分析的視点をもって見ていく、ということなんだと思います。「できなさを子どものせいにしない」とよく言ってきましたが、いまや学力だけでなく、そうした子どもたちの態度や行動にもそうした配慮が求められる、ということでしょう。

杉四小のインクルーシブ教育とは

「できないことをほったらかしにしない教育」